

千代田区長 様

学校名(幹事大学) 学校法人東京家政学院
 所在地 東京都千代田区三番町22番地
 代表者名 理事長 吉武 博通

「千代田学」に関する区内大学等の事業提案制度 「共同事業」実施提案書

「千代田学」に関する区内大学等の事業提案制度要綱に基づき、以下の事業について千代田区から同補助金の交付を受けたいので、同要綱第6条第2項の規定に基づき提案します。

事業名	大規模災害時における学生ボランティアの育成とネットワーク化に関する研究
-----	-------------------------------------

幹事大学	東京家政学院大学	
研究代表者	氏名	酒井 治子
	所属・学位	東京家政学院大学 人間栄養学部 教授 博士(栄養学)
	専門研究活動分野	帰宅困難者支援における栄養・食支援に関する研究 地域栄養教育学、食生態学
	連絡先	電話番号：03-3262-2692 E-mail: E-mail: hsakai@kasei-gakuin.ac.jp

	学校名	研究者(所属・氏名)	役割分担
共同大学	大妻女子大学	堀 洋元 人間関係学部人間関係学科 准教授	学生および職員を対象とした防災・減災意識に関する研究
	大妻女子大学 短期大学部	富永 暁子 家政科 准教授	帰宅困難者支援における食に関する研究
	共立女子大学	深津 謙一郎 文芸学部 文芸学科 教授	学生ボランティアの育成及び地域社会とのネットワークの構築
	共立女子短期大学	渡辺 明日香 生活科学科 教授	被災時に必要とされるライフハッツ・プロダクトの調査分析
	二松学舎大学	谷島 貫太 文学部 都市文化デザイン学科 准教授	千代田区における過去の災害に関するワークショップの設計
	法政大学	伊藤 マモル 法学部 政治学科 教授	帰宅困難者支援施設の健康管理に関する研究
	専修大学	小林 貴徳 国際コミュニケーション学部 異文化コミュニケーション学科 准教授	学生ボランティアの地域防災への参加促進、および大学間のネットワーク強化

【添付書類】 第1号様式の4 「共同事業」実施計画書

第1号様式の5 「共同事業」経費見積書

「千代田学」本共同提案実績	■初年度目	□2年度目	□3年度目
本共同提案事業の実績 ※本共同提案事業の実績を分かりやすく具体的に記入してください。 (過去の事業成果、区との関わり等) ※初年度目の場合は記入不要です。			
「千代田学」におけるこれまでの事業提案名及び成果・実績			
※「千代田学」事業(単独提案・共同提案)での実績があれば記入してください。(実績が無い場合は記入不要です。)			
<p>令和3年度「自然災害発生時における大学を拠点とした帰宅困難者支援に関する研究(1)学生版KUG(帰宅困難者支援施設運営ゲーム)の開発」、令和4年度「自然災害発生時における大学を拠点とした帰宅困難者支援に関する研究(2)教職員及び学生を対象とした帰宅困難者支援施設運営ゲームの開発」、令和5年度「自然災害発生時における大学を拠点とした帰宅困難者支援に関する研究(3)地域連携を視野に入れた帰宅困難者支援施設運営ゲームの開発」をすすめ、下記の成果を得ることができた。</p> <ul style="list-style-type: none"> ▶ 千代田区における過去の自然災害の歴史記録の集積と、帰宅困難者施設における防災に必要な情報・用品等のデータが収集された。 ▶ 学生を対象とした防災意識の実態が把握でき、防災教育の内容に向けた基礎資料が収集できた。 ▶ 疑似的な一時帰宅困難者受け入れ施設における宿泊を体験した学生を対象とした調査において、精神的ストレスが高まる傾向が確認された。様々なストレスが想定される中で、特に睡眠の質が乱される影響は大きいと考えられ、さらに精査する必要がある。また、食事や排泄行動等が制限されることの影響も今後の検討課題である。 ▶ 各大学において学生・教職員・地域と連携した帰宅困難者支援施設運営ゲーム(以下、KUG)を実施し、その効果に関する情報の共有ができた。 			
研究者の実績 ※研究者の実績を分かりやすく具体的に記入してください。 (千代田区及び他自治体での活動実績等)			
【酒井治子 教授(東京家政学院大学)】			
<p>「千代田学」に事業については、平成31年度に加えて、令和2年度「千代田区における和食文化体験・交流資源の開発と活用に関する研究」、令和3年度「千代田区における和食文化・芸術の体験プログラム開発に関する研究」では研究代表を務め、令和4年度「千代田区におけるSDGs達成に向けた共創的な食育推進に関する研究」では分担研究をすすめてきた。平成31年からは千代田区文化芸術プラン(第四次)策定にかかる検討会議 副委員長を務めている。また、令和3～5年度の「自然災害発生時における大学を拠点とした帰宅困難者支援に関する研究」、令和5年度千代田区防災メニューグランプリ審査員を務めた。</p>			
【堀洋元 准教授(大妻女子大学)】			
<p>広域災害における避難所運営訓練システムSTEP(Simulation Training of Earthquake Shelter Program)を開発し、実践活動等通して地域住民の防災意識向上に貢献している。</p>			
<p>千代田区キャンパスコンソ共同公開講座、多摩市関戸地球大学院等で防災に関する講演を実施。大妻防災講座「大妻防災BBQ」では、地域住民と学生が多数参加した。大妻女子大学地域連携プロジェクト「みんなで防災大作戦～防災を日常に」では学生による防災のアイデアを活かして地域住民と連携し実践している。令和5年度千代田区防災メニューグランプリ審査員を務めた。</p>			
【富永暁子 准教授(大妻女子大学短期大学部)】			
<p>平成26年度、27年度「千代田学」の事業において、「千代田区の高齢者と子どもをつなぐ食育交流の試</p>			

み)、令和元年度「千代田学」は、「千代田区在住・在勤者を対象にした PHR(Personal Health Record)を活用した健康増進プログラムモデルの開発」を研究代表としてすすめてきた。平成 29 年度、30 年度千代田区栄養管理訪問サービス事業にスタッフとして関わった。また平成 29 年、30 年には大妻女子大学地域貢献プロジェクト「『だし』で育む和食のみらい推進プロジェクト」を計画、実施してきた。

【深津謙一郎 教授(共立女子大学)】

平成 19 年よりボランティア団体・神保町応援隊の活動に参加。平成 28 年に開催された「神保町・漱石フェス」では、研究分野(日本近代文学)を活かして街歩きツアー「夏目漱石青春の地に行く」の講師を務めた。共立女子大学・共立女子短期大学では、社会連携センター長(令和 4 年～現在)として、地域社会との連携、ネットワーク構築に向けての支援を行っているほか、PBL 型授業にボランティア活動を組み入れた「サービス・ラーニング」の正課教育導入準備を進め、令和 5 年には「神保町ブックフェスティバルに参加して「共立リーダーシップ」を身につけよう！」を担当。千代田区キャンパスコンソでは、令和 5 年のシンポジウム「人口減少社会の中の地域と大学連携」で、「大学連携・地域連携の取組みに参加した学生による活動報告」のコーディネーターを務めた。

【渡辺明日香 教授(共立女子短期大学)】

ストリートファッションのフィールドワークを平成 6 年より継続しており、生活者の衣食住に密接な生活プロダクトの研究・教育を行っている。共立女子大学・共立女子短期大学では、ボランティアセンター長(令和元年～現在)、学生部長および全学学生委員会委員長(令和 3 年～現在)として、緊急避難訓練・防災訓練等の実施、学生と教職員有志による Stand up!プロジェクトにおける「ボランティアでバンザイ!」「防災意識を高めようプロジェクト」の支援、ボランティアセンターによる「ボランティアワークショップ」等を通じた学生のボランティア活動の支援を行っている。

【谷島貢太 准教授(二松学舎大学)】

平成 30 年度から令和 2 年度にかけて、千代田学採択事業として「千代田区の郷土資料を用いた Wikipedia 記事作成ワークショップの展開」を実施。これまで Wikipedia の記事が存在していなかった千代田区の文化財を対象として、一般参加のワークショップを計画、実施してきた。

【伊藤マモル 教授(法政大学)】

フェンシング日本代表選手らの競技パフォーマンスを高めるためのコンディショニングに関する研究と教育に長年携わってきた。法政大学ではボランティアセンター長(平成 30 年度～令和 2 年度)として、学生の「東北被災地ボランティアツアー」を毎年度実施し、被災地に対する理解を深め、防災意識の風化防止に貢献した。令和元年度から本学キャンパスにおいて「防災キャンプ(疑似避難施設宿泊訓練)」を実施し、「千代田区内近接大学の高等教育連携強化コンソーシアム」と連携し、大学生の防災減災意識を高めるための啓蒙活動を継続するとともに、法政大学教育開発支援機構が主催する集中講義型の課題解決型フィールドワーク for SDGs において、首都大規模自然災害時に一時帰宅困難者となった本学学生・教職員と一般人の救済をテーマに防災・減災に関するアクティブラーニング型の教育プログラムを開発し、実践している。

【小林貴徳 准教授(専修大学)】

平成 15 年度からメキシコの先住民コミュニティを対象とする文化人類学的な研究調査を行ってきたが、メキシコ中部地震が発生した平成 29 年度より、在来知を活用した地域防災の仕組みづくりの研究プロジェクトに着手した。令和 4 年度からは、科研費「メキシコ先住民村落部における災害脆弱性の解明：民俗知を活かす地域防災モデルの構築」(基盤研究(C)：課題番号 22K12547)を進めているほか、SATREPS(地球規模課題対応国際科学技術協力プログラム)の研究課題「北中米太平洋沿岸部における巨大地震・津波複合災害リスク軽減に向けた総合的研究」の共同研究者として、防災を柱とする国際協力を推進している。

第 1 号様式の 4 (第 6 条関係)

「千代田学」に関する区内大学等の事業提案制度「共同事業」実施計画書

事業名	大規模災害時における学生ボランティアの育成とネットワーク化に関する研究
-----	-------------------------------------

テーマ ※要綱別表1又は区が設定するテーマから選択	・災害対策・危機管理に関すること等の調査・研究 ・区の歴史・文化財に関すること
-------------------------------------	--

事業目的

首都直下型地震やゲリラ豪雨などの予測困難な大規模自然災害が発生した場合、千代田区内近接大学の高等教育連携強化コンソーシアム(以下、千代田区キャンパスコンソ)の5大学・2短期大学を含む区内の大学は、千代田区と『大規模災害時における協力体制に関する基本協定』を締結している。具体的には、次の3つの項目、すなわち、①学生ボランティアの育成、②地域住民および帰宅困難者等の被災者への一時的な施設の提供、③大学施設に収容した被災者への備蓄物資の提供等の使命を担うことが期待されている。しかしながら、実際の運営を考えると、各大学では施設開設に伴う安全・衛生管理、感染症対策、備蓄品、通信手段などの確保、情報提供体制など、施設運営に関する情報共有や連携の在り方について十分に検討されているとはいえない。

こうした背景の中で、令和3～5年度には、各大学の帰宅困難者支援施設運営の計画や災害対応体制の再構築に関する課題を明確化し、災害復興や防災対策に役立てるために、千代田区における過去の災害記録、また、防災に必要な情報・用品等のアーカイブ化、また、各大学で学生版・職員版・地域連携版の帰宅困難者支援施設運営ゲーム(以下、KUG)の開発をすすめる、各大学で帰宅困難者支援をすすめるための学習プログラムを構築し、防災・減災意識の変化に及ぼすKUGの教育的効果を検証してきた。

そこで、令和6年度には、今までの研究成果を踏まえ、大きく2点を研究目的とする。1)首都圏大規模災害時における学生災害ボランティアの育成を試み、大学を含め、千代田区の社会資源を巻き込んだ教育内容を展開し、その効果を明らかにすること、2)既存の各大学でのボランティアサークルが個々に活動するだけでなく、近隣企業(「富士見・飯田橋駅周辺地区帰宅困難者対策地域協力会)との連携を深め、その活動や情報を発信し合うネットワークづくりをすすめる、その効果を検証する。

そのために、令和6年度、千代田区キャンパスコンソでの単位互換科目として、「課題解決型フィールドワーク～大規模災害自然発生時の大学キャンパスでの避難生活のマネジメントI—千代田キャンパスコンソ及び近隣企業との連携」を開設し、各大学から受講生を募ることで学生災害ボランティアの育成を進める。学生は①大規模自然災害に関する知識を深める、②与えられた課題に対するグループワークによる実習及び演習を中心に、積極的なコミュニケーションを通して、想定される多様な避難者、および、避難所で生じる問題に対して臨機応変に対応することの難しさを共に学び、防災行動に対する複眼的な目を養うことを到達目標とする。教育内容については、各大学の研究者が参画すると共に、千代田区・災害救援ボランティア推進委員会、千代田区社会福祉協議会、一般社団法人防災教育普及協会、および地域の関係団体、企業等と連携しながら、構築する。その一部には、令和5年度まで研究をすすめてきた各大学のKUGを活用した学習や、研究により得られた知見や解決した問題点などの資料(動画等)を活用していく。各段階で、千代田区の危機管理政策経営担当部門に提供したい。

本企画は、千代田区キャンパスコンソを構成する大学・短期大学による共同提案である。各大学が区と取組む災害対策において、栄養・食、歴史・文化、健康管理・情報等、それぞれ有する専門分野の切り口から連携・協力し、調査・研究を行うものである。複数の大学で取組むことにより、1つの大学による提案では難しい多角的な視点から調査・研究が可能となる。また、活動には各大学の学生が連携して取組む。他大学の学生との意見交換を通して、参加学生は多様なものの見方・考え方を理解し、新しい気づきにより柔軟な発想による提案等が期待できる。

注釈：KUGとは、帰宅困難者支援施設で生じる可能性がある様々な出来事や避難者への対応など、現場で起こり得る問題(研究者の専門性を活かした問題の提示など)をゲーム感覚で模擬体験できるゲームのこと

区との関連性・区政や地域への貢献

本事業は学生や区民(区の関係機関・団体)の目線から帰宅困難者支援の在り方を見直し、学生ボランティアの育成のための教育内容を共創していくことを重視する。その過程で、どのような学生ボランティアを育成すべきか、めざすボランティア像を共有していくことを可能にする。さらには、学生のみならず、地域の関係団体にも、「帰宅困難者支援施設運営ゲーム(KUG)」や歴史的な災害を振り返る、災害時の栄養・食生活に備えることで、防災・減災意識を啓発する。発災時の帰宅困難者支援施設としての効率的な運営、および円滑な管理体制の充実と強化に資する。一方、より現実的な視点から各大学の現状と課題(事前の備えや災害応急対応などに資する改善点)が明確化

されることが期待され、千代田区の政策に資する基礎的資料やそれに基づく提言が可能である。

本事業で作成した学生ボランティア育成のプログラムは、区内の大学のみならず、企業、区の職員対象にも展開可能であり、千代田区における防災・減災意識を高めるための教育内容として活用できる。調査・研究の成果についても動画コンテンツ化し、広く区民等が視聴できるようにする。

事業計画・研究手法・大学別の役割

1) 大規模災害時における学生ボランティアの育成を試み、大学を含め、千代田区の社会資源を巻き込んだ教育内容を展開し、その効果の解明

千代田コンソの学生災害ボランティアの育成につながる科目「課題解決型フィールドワーク～大規模災害自然発生時の大学キャンパスでの避難生活のマネジメントⅠ－千代田キャンパスコンソ及び近隣企業との連携」（100分 14回 演習2単位）を単位互換科目として設置し、その教育内容の具体化:令和6年8月

講座は法政大学で主催し、他の大学の学生が受講する形式をとる。

その内容は、ガイダンスに始まり、帰宅困難者支援施設の避難施設における健康と衛生管理、市ヶ谷キャンパスにおける帰宅困難者支援および備蓄倉庫の視察、疑似的帰宅困難者支援施設への移動と受入れ演習、寝床整備とトイレ実習および測定、東京消防庁・普通救命講習、地域社会における帰宅困難者支援に関する課題と事例紹介(千代田区内の企業の取組み等)、帰宅困難者支援施設における環境整備と安全対策(法政大学)、想定されるトラブルの収集(大妻女子大学)、要配慮者を含めた災害時の栄養・食生活管理(東京家政学院大学)、災害時に役立つ簡単クッキング方法の検討(大妻女子大学短期大学部)、防災のリスクを認識し防災意識を高めるワークショップ(二松学舎大学)、学生ボランティアの育成・地域防災への参加、大学間ネットワークの構築(共立女子大学、専修大学)、災害時のライフハックを想定した防災グッズの実体験ワークショップの実施(共立女子短期大学)で構成され、受講者に関するKUGの実践・振り返り、まとめ等について考案中である。

プログラムの中に、一般社団法人防災教育普及協会から、防災・減災に関するアドバイザー講師を招聘し、防災・減災に向けて大学で連携すべき社会資源(近隣企業・社会福祉協議会やNPO・ボランティア団体など)も参画していただくことを予定している。さらに、受講生の学習効果の検証も試みる。

プログラムの到達目標は、次のとおりとしている。

1. 帰宅困難者支援施設の運営にボランティアとして携わることになる学生も、また被災者であるという心構えを考える。
2. 1を踏まえた上で、不特定多数の帰宅困難者や予期せぬ多様な問題への対応を検討し、千代田区キャンパスコンソーシアム大学や近隣企業との連携を視野に問題解決を図ることの2点である。これらを達成するために、本研究におけるプログラムにおいて、大規模自然災害に関する知識を深めるとともに、災害発生直後を想定したキャンパス内における帰宅困難者としての宿泊体験を通じ、多様な避難者および避難施設で生じる可能性が高い健康および環境衛生等の問題に着目し、臨機応変に対応することの難しさを学ぶ。また、防災行動に対する複眼的な目を養うことで、サステナブルな防災意識向上に資する大学教育の在り方を探る。

プログラムは全3日間を計画しており、千代田区内近接大学の高等教育連携強化コンソーシアム大学の学生が単位互換科目として参加するとともに、高大連携高等学校の生徒、および近隣企業や地域在住者が参加し、相乗的な学習環境を提供することによる学習効果を検証する。

2) 学生・職員・地域が連携した帰宅困難者支援施設運営ゲームの実践と評価

令和3年度から5年度にかけて、各大学で学生および教職員によるKUGを実施し、図上演習ツールとしての効果測定やKUG評価項目による検討を行った。その結果、参加者はKUGの有効性や有用性を感じており、自身にとっても動機づけが高まる体験であることが示された。しかしながら、測定したのは実施後の短期的な有効性や有用性に過ぎなく、持続的な有効性や有用性に役立つかどうか今後検討していく必要がある。また、どのような測度で有効性や有用性を実証するのか、検討の余地がある。そこで本事業では、各大学で、学生・職員・地域が連携した帰宅困難者支援施設運営ゲームを実践し、そのさらなる効果検証を試みる。

また、参加者からのコメントから、KUGの実施内容に関する改善点が示された。参加者の多くは初めてKUGを実施しており、プログラム全般を十分に理解して臨むこと自体が難解であったことが自由記述回答から明らかになっている。さらには、参加者が継続してKUGを体験することによって、新しい発見や帰宅困難者受入施設を運営するスキルを得たりすることが考えられるため、単発での参加だけでなく、継続して参加した場合の有効性や有用性を検討

する。

さらに、効果検証のみならず各大学で、KUG の実施プログラムを参照して、学生が主体的に参画する施設運営ガイドラインを提言する。

3) 各大学間をつなぐネットワークづくりとその効果の検証

各大学に存在するボランティアサークルを核として、大学を横断する学生たちのネットワークを作っていくとともに、帰宅困難者が発生するような大規模災害時に情報を共有し協力しあえるような仕組みを構築する。この作業は三つのステップで進められる。

1. 災害に関するワークショップをハブとしたネットワークづくり

災害に関するワークショップ (KUG を想定) を各大学で実施、その際に大学を横断してボランティアサークルを中心に学生に参加への呼びかけを行う。そして参加してくれた学生に、後述の「千代田区キャンパスコンソ災害時協力ネットワーク(仮)」について説明し、関心を持ってくれた学生を登録する。

2. 「LINE」を活用した「千代田区キャンパスコンソ災害時協力ネットワーク(仮)」の構築

チャットアプリ「LINE」のオープンチャット機能を用い、「千代田区キャンパスコンソ災害時協力ネットワーク(仮)」のトークルームを作る。そして①で関心を持ってくれた学生にこのトークルームに参加してもらう。加えて、各大学の災害時対応やボランティア組織を担当する事務組織にもこのトークルームの情報を共有する。

3. 「千代田区キャンパスコンソ災害時協力ネットワーク(仮)」の定例イベントの実施

「ネットワーク」のトークルームを定期的に活性化するために、このトークルームを活用した年1回開催のイベントを実施する。たとえばトークルームで各大学の状況をリアルタイムで情報共有しながら、複数の大学で同時刻に災害関連のワークショップ (KUG など) を行う。

4) 令和6年度の報告書作成：令和7年2～3月(全大学)

スケジュール欄(上記のとおり)

研究成果の発表

学生ボランティア育成のプログラムの作成プロセスや、学生及び地域の関係団体への教育効果を、学会(防災教育学会や避難所・避難生活学会等)や各大学紀要等で発表、千代田区における災害に関する資料の展示(千代田キャンパスコンソの各大学の各図書館・各博物館・資料館、および千代田区立図書館など)、リーフレット、インターネットなどの媒体、動画コンテンツを提供する。千代田区の他大学、区民等に向けたセミナーを開催し、今後の研究につなげる。また、「令和7年3月に開催する『ちよだコミュニティラボ ライブ!』にて研究成果を発表予定」等、区民と研究成果を共有する場を設ける。

学生の活用

1. 千代田区コンソーシアムの学生災害ボランティアの育成につながる科目への受講を広く募り、学習内容についてもグループワークを中心に行い、ファシリテーターは可能な限り学生主体で行う。
2. 学生ボランティア育成プログラムの教材開発も、学生の研究・教育活動の機会としても位置付けて実施する。
3. 学生ボランティアサークルのネットワーク化についても各大学の学生(ゼミ・研究室、ボランティア関連のサークル等)からの有志学生を募り、実施する。